

# パネル発表「オオカマキリの飼育がもたらす児童の生命観の変化」 —学級経営上の方略として—

山下浩之

## 1 はじめに

平成23年小学校学習指導要領では理科第3学年および第4学年の目標に「生物を愛護する態度を育てる」ことが、第5学年および第6学年では「生命を尊重する態度を育てる」ことが掲げられている。さらにその学習内容として前者では「身近な昆虫や植物を探したり育てたりして」とあり、飼育活動が目標達成のための重要な手段であることが明記されている。

今回の実践は、福岡市の小学校4年生1クラスが1匹ずつオオカマキリを飼育し、それを通して児童に肉食動物としての生命尊重の意味を再考させることと、さらにこの飼育活動によって学級経営上どのような効果が得られたかを考察した。

## 2 オオカマキリという昆虫の特色

簡単にオオカマキリについて触れてみたい。

オオカマキリを飼育の対象にする理由をまとめてみると次のようになる。

- (1) 日本国内全土に分布し、個体数も多いため採集圧に影響されにくい。
- (2) 身近な大型昆虫で、児童のほぼ全員がその名称や存在を知っている。
- (3) 卵から成虫まで、1年1サイクルの生活環を持つ。
- (4) 教科書には飼育動物として取り上げられにくい「肉食動物」である。
- (5) 物理的にも衛生上も比較的安全に飼育を行うことができる。

## 3 飼育後のアンケートの結果と考察

実施時期 2012年11月13日～11月26日

実施時間 10分間

対象 福岡市公立小学校4年生95人

小学校	カマキリ類		合計
	飼育経験者	飼育未経験者	
NO小学校(n=33)	32	1	33
NA小学校(n=31)	5	26	31
MI小学校(n=31)	11	20	31
合計 (N=95)	48	47	95

アンケートの回答から大変興味深い示唆が含まれていた。

①飼育経験者はオオカマキリのエサについて全回答数の90%以上が動物食を挙げているのに対して、未経験者は全回答数の約30%が草や果実などの植物食を挙げている。

②飼育経験者はオオカマキリの飼育によって得られたこととして、家庭や友達とのエサについての会話の増加や一緒に採集する機会の増加を挙げた児童が多数存在した。

③飼育経験者はオオカマキリが捕食する場合について、約80%が肯定的な評価をしているのに対し、未経験者は約50%が否定的な評価を下した。さらにオオカマキリが被捕食者となる場合は飼育経験者は65%は否定的な評価を下したことにに対し、未経験者は34%にとどまった。

これらの結果から、

- ・オオカマキリの生態は飼育活動を行うことによって具体的な知識が得られること
  - ・飼育活動を通して様々なコミュニケーションが生じ、問題点や改善点などを交流する機会が得られるようになってくること
  - ・飼育対象生物への感情移入は避けられないが少なくとも客観的な否定感情とは区別して考える必要があること
- などを考察できる。

## 4 終わりに

恒温動物の哺乳類や鳥類の飼育は確かに抱いて温かさを感じ取ることができるという最大限のメリットがある。一方、昆虫類でも飼育活動の教育的効果は大きく、初等教育の中でぜひ取り入れてほしい活動である。

飼育活動は「生物学」の原点であり、将来学ぶであろう生物学の全ての内容を総合的に含有しているだけでなく、「命を愛する」という最も崇高な価値を学ばせてくれる活動でもある。

(福岡市立野多目小学校)

### 【参考文献】

小学校学習指導要領理科編，文部科学省，2011  
星野昌治他33名，たのしい理科4年-1, 4年-2 大日本図書株式会社